

言語発達の遅れがみられる児童に対する指導

～小学部高学年E児への指導の実践から～

佐坂 佳晃

E児は入学時から言語発達の遅れが見られ、他児との差が大きかった。4年時当初でも2・3語文がようやく話せる状態で、単語を羅列することも多かった。語彙量も乏しく、生活言語が極端に身に付いていなかった。そこで4年時から発音指導週1時間と国語週4時間を取り出し、担任や自立活動担当教員等が個別に本児の実態に合わせた指導を行うことになった。本稿では担任が行った高学年におけるE児への指導の実践を紹介し、言語発達の遅れがみられる児童に対する適切な指導について述べてみたい。

【キーワード】 言語発達の遅れ 言葉のノート 自然なやり取り 日記指導

1. 入学当初の実態

語彙がきわめて少なく、自分の名前以外に言えたのは、おとうさん、おかあさん、色（赤、青、黒）動物（犬、ねこ）身の回りのもの（くつ、いす）等ごくわずかで、動作語はほとんど使えなかった。生活行動面では、回りを見て指示を理解したり、学級の他の児童の助けを借りたりして言葉が理解できなくてもそれほど困らずに過ごせていたが、一斉指導にはほとんど参加できなかった。場の状況を理解する力があるため、言葉を必要としない生活を送ってきたように感じられた。音韻サインは、曖昧さが残り、正しく使えないことが多く、口声模倣の習慣もついていなかったため、なかなか言葉が身につかなかった。E児からの自発的な表出は、声を出して呼ぶことや身振りで伝えることがほとんどだった。

E児のこのような状況は、家庭の都合で幼稚部在籍時にかなり欠席があったこと、家庭での支援がほとんど得られないことによると考えられた。

2. 4年時の実態

日常での意志の伝え合いは少しずつできるようになってきたが、依然として助詞の入らない単語の羅列になることも多く、生活言語面での指導が必要であった。こうした実態を踏まえて、取り出しでの言語指導は、低学年時の担任を含む3名の教員と、担任で行うことになった。

算数は、図形や量についてはよく理解していた。しかし文章題で引っかかってしまうことが多かった。例えば、「行きました」「来ました」「居ました」は3つとも「イ列音」から始まるので、読話する際同じに見えてしまい、3つの言葉の意味の違いが理解できておらず正しく文章題を解くことができないというレベルであった。しかしいろいろなことによく気がつき、相手に伝えたい中身をたくさん持っている児童であった。また言葉の意味は分からなくても、場の状況や周囲の人の表情から判断できてしまうことが多く、それがかえって言葉が入りにくい要因の1つではないかとも考えられた。

3. 指導内容

(1) 言語の拡充

①「言葉のノート」

生活の中で実際にやり取りした内容は、児童に直接関わることであり指導した内容が定着しやすい。このことを踏まえて4年時当初から学校で担任とやり取りした内容を、その都度専用のノートに書き留めた（1日平均1～3文）。書き留めた文は、助詞や押さえない語句をブランクにした。そしてすぐにブランクとなっている助詞や語句が正しく言えるかどうか確認し、正しく言えるまで繰り返し練習した。また必要に応じて語句や言い回しの意味を説明した。

④日記指導

日記の内容については本人に任せたが、平日でも家庭のことばかり書いてくる時は、「学校であったことも書いてくださいね。」と指示を出した。また行事の後は必ずそれについて書かせた。

図1の☆1に示したように、表現の誤りは訂正させた。また誤りではないが、表現の工夫をすることでこのように良くなるという例を書いて、それを書かせることもあった。いずれも表現力の向上を図ったものである。

誤りの訂正が多くなりすぎるとE児の書く意欲を減退させてしまうので、「△の所はしっかり読んで確認しようね。」ということにした。

☆2はE児に質問し、それに答えるという形をとり中身を深めるものである。またうまく書けた表現はなるべく褒めるようにした。

特別に上手に書けた時は、そのページに金色の短冊が付いた「日金賞」がもらえる。それはE児の励みにもなったようだ。

担任のコメントも図1にあるように空白を作り、書き込ませるようにすることで語彙力の向上を図った。

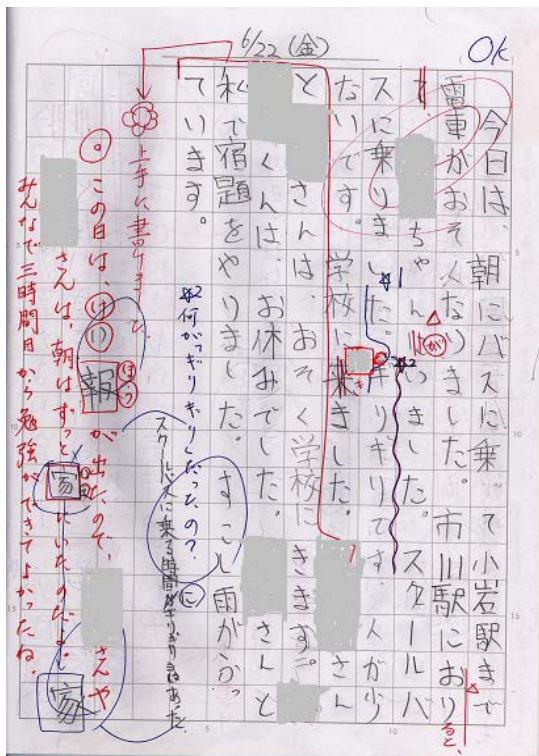


図1 日記（6年1学期）

(2) 一斉指導（社会科「元との戦い」6年）

①単元名 日本歩み（日本文教出版6年上）

小単元名

武士による政治は、どのように進められたの

②小単元目標

武士による政治が始まったことや室町文化が生まれたことが分かり、国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深めるようにする。

③本時の目標

元との戦いの様子について知り、鎌倉幕府が総力をあげて戦ったことに気づく。

④学級の児童の実態およびE児の本時の目標

本学級は男子1名、女子4名からなる。E児を除く4名のうち3名は聴力や発音の明瞭さに違いはあるものの、相手の話や学習内容を概ね理解することができる。他の1名は聴覚をよく活用し、日常会話はある程度スムーズに行えるが、語彙や文法の力がやや弱いため、授業者の発問の意図がつかめず、不適切な答え方をすることがある。

E児の本時の目標は、以下の3つである。

A 前時の復習で、発問に答えられること。

イ モンゴル帝国が元という国を建てたということと、元が日本に兵を送り攻めてくることになった経緯のあらましを理解すること。

ウ 本時で扱う人物の名前を覚えて言えること。

⑤展開の一部（E：E児 C：他の児童 全：全員）

T：ではこれから社会の勉強を始めましょう。

T：今何時代の勉強をしていますか。はいEさん。

E：鎌倉時代です。

T：どうですか。いいですね。今鎌倉時代の勉強をしています。

T：鎌倉時代の将軍は、手柄を立てた御家人に何を与えましたか。

E：領地です。

T：別な言葉で。

E：土地です。

T：では領地を与えたことを何と言うの。

E：御恩です。

T：(文字カードを使って)読むよ。

全：御恩。

T：御家人は将軍から領地をもらいました。その代わり御家人は〇〇〇をかけてがんばって戦うぞという気持ちになったね。何をかけるんだっけ。

C：命です。

T：どうですか。

全：いいです。

T：いいですね。命をかけて戦うぞという気持ちに御家人はなりました。このことを難しい言葉で何て言うんだったかな。これもEさんに言ってもらおうかな。

E：奉公です。

T：よく言えました。

〈配慮した点〉

一斉指導では、E児に対する個別の発問や指示を行うことは難しい。授業者の場合は、全員への発問の中で、E児に理解させたいところでは、E児に答えて欲しい発問を用意している。もちろん他の児童の理解力や興味など全体のバランスを考慮しながら発問計画を含めた授業展開を考えている。

上記の展開部分は、前時の復習である。復習部分はE児に理解させたいところなので、ほぼE児が発問に答えることになっている。故に授業中に理解ができなかった内容については、徐々にではあるがE児は、次時まで確認をした上で授業に臨めるようになった。

T：元という国ができた頃、日本の鎌倉幕府は、誰が支配していたの。Eさん、答えて。

E：・・・・・・(答えられない。)

T：(源氏と北条氏の系図を使って)これにヒントはある。

C：ヒントは書いてあるよ。

T：Eさん、この「元」という国の名前がどこかにないですか。あるね。

E：(系図に書かれた「元寇」を指すことができた。)

T：鎌倉幕府を支配していたのは。

E：時宗。

T：〇〇時宗。

E：北条時宗です。

〈配慮した点〉

「元という国ができた頃、日本の鎌倉幕府は、誰が支配していたの。」という発問は、E児にとってはかなり難しいものである。例えば「支配する」は、前もって指導しておかねば発問の意図をつかむことはできない。

授業者はE児はそれまでの授業を通して、だいたいの語句の意味が分かり発問の意図がつかめるものと判断した。ここではE児が教科書や年表、資料集を十分に活用することができれば、自力で理解ができる内容であると考えたのである。

実際にはE児はどの資料のどこを見れば分かるのかにつまずいてしまったので、手立てとして用意しておいた「源氏と北条氏の系図」に着目するように指示した。授業者からヒントは出されたものの何とか「北条時宗」の名前を選び出すことができた。こういった状況では、「ヒントは書いてあるよ。」といった他の児童からの発言もE児にとって答えを導き出すための良いアドバイスになる場合がある。

4. 成果と課題

表2 E児の言語力テストの結果

4年時	5年時	6年時
42.3%	38.5%	50.0%

基本的な生活言語については、ある程度話し言葉として日常生活で使用できるまでになったと思われる。今後は学習言語の習得が大きな課題である。E児のがんばりに期待したい。

〔参考文献〕

- ・江口朋子：E児に対する指導①(1・2年時担任による指導). 確かな力をつける教科指導を目指して～聴覚障害児の生きる力の育成のために～、80-85、2013